

「男、突っ走る！」

第58回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

木内 雅也 (21)

名古屋芸術専門学校3年生

福本 瑞枝 (21)

名古屋芸術専門学校3年生

1 神宮前駅・表

改札口から雅也と瑞枝が出てくる。

N 「二〇一七年新春。僕は、みずちゃんに誘われて、少し遅い初詣のために、熱田神宮へ行くことになりました」

2 熱田神宮・境内

賽銭箱に小銭を投げて鈴を鳴らし、手を合わせる雅也と瑞枝。

× × ×

雅也と瑞枝が歩いている。

瑞枝 「うちーは、何お願いしたの？」

雅也 「脚本家として、これから商売繁盛できますようにって」

瑞枝 「そっか。これからだもんね、うちーは」

雅也 「みずちゃんは？」

瑞枝 「そりゃ、早く就職先が見つかりますよ うにって」

雅也 「決まると良いね、早く」

瑞枝「うん」

雅也「決まらないと、焦っちゃうよね」

瑞枝「まあね……」

雅也「……」

瑞枝、通りすがりに茶屋を見つけると、

瑞枝「あ、ねえ。ちよつと休憩していかな

い？ 和菓子とかぜんざいあるみたいだけ

ど」

雅也「良いね、少し休もうか」

3 同・茶屋

和菓子を食べながら、抹茶を飲んでい
る雅也——昆布を食べながら、ぜんざ
いをすすっている瑞枝。

瑞枝「うん、この昆布美味しい」

雅也「おやじかよ」

瑞枝「あ、そういうこと言っちゃう」

雅也「うそうそ」

瑞枝「ちよつと食べる？」

雅也「うん。あ、抹茶飲む？」

瑞枝「飲みたい」

互いにお椀を交換して、口にする二人。

雅也「あ、美味しい」

瑞枝「ちようど苦くて良いね」

雅也「でしょ」

瑞枝「はい、ありがとう」

雅也「いえいえ」

互いにお椀を元に戻し合う二人。

雅也「たまにはさ、こういうゆっくりした時

間も良いね」

瑞枝「分かる。何か、現実逃避してる感じがしてさ」

雅也「お互い、ずっと何か追われてたもんね。ゆっくりしたくもなるわ」

瑞枝「眞榮田との短編ドラマの撮影が終わって、ちよつとひと段落したんじゃない？」

雅也「まあね。結局あいつ、脚本書けないって振ったじゃん。あの後、何回か打ち合わせもしたんだよ。夜に電話つないで、スピーカーにして、どうするこうするって。話

し合いながら書いたほうが早いと思って、

俺同時進行で原稿書いたもんね」

瑞枝「よくやったね」

雅也「まあね。でもさ、驚いたのは、撮影にみずちゃんも駆り出されてたことだよ。まさかスタッフ側にみずちゃんがいるなんて思わなかったし」

瑞枝「私だってやるつもりなかったよ。でも、あいつがどうしても手伝ってくれてって言うから、まあ最後だし、やってやるかと思っ
つてね」

雅也「最後に、眞榮田と一緒に作品作れて良かったと思ってる。まあ、演技力はちよつときつかったけど」

瑞枝「当たり前前だよ。うちーは、役者じゃなくて書く人なんだから」

雅也「（苦笑して）まあね」

瑞枝「仕事の脚本のほうは、どう？」

雅也「今、プロデューサーと打ち合わせしながら、第三稿を書いているところ。もういろ

んなことが同時進行でしょう。いくら学生
の身分とはいえ、せっかく脚本のオファー
が来たからちゃんとしたものを書かなきゃ
って思うし、フリーペーパーやら卒業進級
制作展の雑誌とシナリオ本の入稿準備も大
詰めになってくるでしょ。何度分身が欲し
いと思ったことか」

瑞枝「一年生の頃から、うちーはいろいろ
やってたよね。うちーとがつつり話すよ
うになったのは、一年の学園祭のお化け屋
敷の時だったじゃん。あの時も、確かうち
ー駄菓子屋の準備と掛け持ちだったよね」

雅也「あったね。そんなことも。今思えば、
まだ学校生活の環境にも慣れてないのに、
よく掛け持ちなんてしたなって思うわ」

瑞枝「学園祭が終わってさ、秋休みにはバー
ベキューやったよね。うちーのチーズケ
ーキ美味しかったな」

雅也「来月のバレンタインデーに作ってもつ
てこうかな。多分、これが学生生活最後の

お菓子作りになると思うけど」

瑞枝「楽しみにしてるわ」

雅也「そのバーベキューの後に、みんなで朝まで遊んだよね。ビリヤードとかダーツとかカラオケとか」

瑞枝「なつ姐さんと私とうっちーで、カラオケ歌ったね」

雅也「上手かったよね、なつ姐さんのカラオケ」

瑞枝「歌姫だった、あの時のなつ姐さん」

雅也「明け方、俺が座ったまま眠っちゃってさ、あの写真も拡散されたね」

瑞枝「あれが、歩くフリー素材のきっかけだったね」

雅也「あ、思い出した。あの時、眞榮田の誕生日サプライズやってさ、俺あいつに川に突き落とされた」

瑞枝「そうだった。あんなに体張って笑い取れるの、うちの学校じゃうちーしかないないよ」

雅也「そうでもないと思うけど」

瑞枝「秋休みが終わったかと思えば、すぐ海外研修の準備だったね」

雅也「アメリカの一週間、あっという間だったね。眞榮田の部屋で、みんな集まって、ご飯作ったり、ゲームしたり。修学旅行みたいな感覚だった」

瑞枝「私、アメリカから戻ってきてから、無償にラーメン食べたくなって、セントレア戻ってきたら、その足で途中ラーメン屋さん寄ったの」

雅也「俺も。何だろうね、あれ不思議と麺をすすりたくなってね。俺も迎えに来てくれた父親に、ラーメン屋行ってくれてっ頼んだ」

瑞枝「アメリカも楽しかったけど、やっぱり日本が良いね」

雅也「アメリカかぶれになって帰ってきてちゃったけど、そういう余韻に浸る間もないまま、最初の卒業進級制作展の準備にすぐ入

って、バタバタだったね。みずちゃんなんか、オープニング映像作ってたもんね」

瑞枝「大変だったよ、あの時は。まあお互い様だよ。うちーもさ、実行委員会で板挟みにあってさ」

雅也「あの前後だったかな、確か映像専攻って企業CMのプロジェクトがあって、バタバタしてたよね」

瑞枝「ああ、してた」

雅也「あの時、俺大久保に声かけられて、いきなり資料作りでホチキス止めたんだよ」

瑞枝「その説はお世話になりました」

雅也「あ、それを言えば、俺も今年のシナリオ本制作についてのプレゼンするとき、資料のホチキス止めしてくれてありがとう」

瑞枝「ああ、あったね」

雅也「何でこんなに俺たちって、追われることとかバタバタすることが多いんだろうね」

瑞枝「宿命なんじゃないかな」

雅也「一年生の年末、ちやうど卒業進級制作

展の準備が忙しくなりそうなときに、眞榮

田とゆきちゃんのことがあったじゃん」

瑞枝「ああ……あったね」

雅也「もう二人ともすっかり吹っ切れてるから、今となっては何とも思っていないだろうけど」

瑞枝「アメリカ研修のときにも、眞榮田を囲んで今後のこと相談したよね。あ、私もうっちーには恋愛相談乗ってもらったっけ」

雅也「あんなの相談のうちに入らないよ。あの二人の時は、本当に大変だったんだから」

瑞枝「それもあったから、二年生になつてすぐ、私は眞榮田に忠告したんだけどね、恋愛についての」

雅也「よく言ったよね」

瑞枝「あの時は、誰かが行ってあげなきゃと思ってる」

雅也「でもそのみずちゃんは、二年生の途中で三ヶ月、インターンで東京に行っちゃったもんね」

瑞枝「うちーが届けてくれた肉じゃが、美味しかった。嬉しかったもん、あれが届いたとき」

雅也「みずちゃんと加藤に冷凍便で送ったんだよね」

瑞枝「早く戻りたいって思ったもん、あのうちーの肉じゃがが届いたとき。寂しかったんだもん、東京は。いくら加藤が同じだったとはいっても、うちーと一緒にはないから」

雅也「いやいや。よくよく考えたら、同じ専攻なんだから俺よりも加藤とのほうが一緒にいた時間長いでしょ」

瑞枝「そうなのかな。だってさ、こうして話していると、私とうちーって結構一緒にいる時間多いなと思って」

雅也「確かにね。三年間で、結構みずちゃんと一緒にいる時間多いかもしれないね。三年生になってからはさ、ポトフオリオをチェックするようになったり、何度もみず

ちゃんに飲みつぶされて」

瑞枝「潰したわけじゃないよ。うちー
が勝手に飲んでぐったりしてるだけだもん」

雅也「今でも、焼酎の水割りを置いたことは
覚えてるよ。あれからだもん、俺が日本酒
とか焼酎っていう、透明な色をしたお酒を
飲むようになったのは」

瑞枝「良いことじゃん」

雅也「だから、『とんちゃん』にも連れて行
こうって思ったんだから」

瑞枝「あそこの上串美味しいもん。また食べ
に行こうよ」

雅也「うん。この時期なら、まだ湯豆腐もあ
るだろうし」

瑞枝「誕生祝いたもんね」

雅也「したね。若女将がサービスで湯豆腐出
してくれて」

瑞枝「お互い十一月生まれで、誕生日プレゼ
ントも渡しあったしね」

雅也「学校内で女の子の友達はそれなりにい

るけど、いつの間にか腹を割って話せる関係になってたわ」

瑞枝「いつからだろうね。私の中では、うちーはゆきちゃんとのほうが話す機会多い
と思っただけ」

雅也「そうだね。まあ五本の指に入るメンバ
ーってなったら、眞榮田、みずちゃん、ゆ
きちゃん、あつぼん、加藤になるかな」

瑞枝「加藤がそこに入るんだ」

雅也「迷ったよ。他にもなつ姐さんやおっく
ーやぐつちややすーも大久保もいるから」

瑞枝「やっぱり顔が広いね、うちーは。物
理的にも」

雅也「こら」

瑞枝「こういうイジリ、いつまでできるかな」
雅也「ずっとできるでしょ。まあ、就職先が
こつちになればの話だけ」

瑞枝「…」

N 「それから二週間が経った一月下旬。無事に、雑誌やシナリオ本のデータを印刷会社に入稿してすぐのことです」

5 同・5階・502教室

開業届や事業計画などの資料を作成している雅也——と、ドアが勢いよく開き、瑞枝が息を切らしながら駆け込ん
でくる。

瑞枝 「うっちーッ……！」

雅也 「どうしたの、みずちゃん……？」

瑞枝 「決まった……！」

雅也 「え？」

瑞枝 「就職、決まったの」

雅也 「本当ッ……？」

瑞枝 「うん……」

雅也 「どこ？」

瑞枝 「インターンでお世話になったCG制作会社。加藤が、今働いてるところ。当分は契約社員ってことで」

雅也「じゃあ……東京……？」

瑞枝「うん」

雅也「そっか……みずちゃんも、東京行っちゃうんだ」

瑞枝「そんな悲しい顔しないでよ。せっかく決まったんだから」

雅也「ああ……ごめん」

瑞枝「ずっと会えなくなるわけじゃないんだから」

雅也「（苦笑して）そうだよね」

瑞枝「ねえ、近いうち、大須行かない？」

雅也「大須？」

瑞枝「東京に持っていく生活雑貨とかいろいろ買い揃えようかなと思って。うちーも、自分の部屋を事務所に模様替えするなら、装飾品とかいるんじゃない」

雅也「ああ、確かにいるかも。ダメだね、全然そういうのには疎くて」

瑞枝「じゃあ、私が選んであげる」

雅也「ありがとう」

瑞枝「いつが良い？」

雅也「ちよつと待ってね。（と鞆から手帳を取り出すと）えつとね、明後日なら大丈夫」

瑞枝「分かった。じゃあ、時間はまた連絡するね」

雅也「うん」

6 大須商店街・百円均一店（数日後）

雑貨を見ている雅也と瑞枝。

瑞枝「こういう花瓶に花さしたら良いんじゃない？」

雅也「ああ、良いかもね」

× × ×

瑞枝「名札使う？」

雅也「いや、これは使わないかな」

× × ×

雅也「写真立てはどう？」

瑞枝「飾る写真あるかな？」

～ 大須商店街・大須観音

手を合わせている雅也と瑞枝。

×

×

×

雅也が唐揚げの入ったカップを持っており、

瑞枝と共に爪楊枝で刺して食べている。

瑞枝「やっぱ、大須商店街と言えば唐揚げだ

よね」

雅也「最近は、タピオカとセットなのが人気
みたいだよ」

瑞枝「うちのーの口から、『タピオカ』って
言葉が出るとは思わなかった」

雅也「俺、横文字の言葉知らないって思われ
てる？」

瑞枝「え、知ってる？」

雅也「知ってる」

瑞枝「へえ（と雅也のデコを叩く）」

雅也「また叩く」

瑞枝「東京行くまでに、叩き貯めをしとかな
きやと思ってる」

雅也「エネルギーチャージみたいに言うな」

瑞枝「冴えてるね、ツツコミが」

雅也「このツツコミも、もうすぐで終わっちゃうんだよね。個人事業になったら、俺をイジるような人なんているわけないんだもん」

瑞枝「先輩も上司も同僚もいないとなると、心細くなるね」

雅也「まあ、環境が変わって最初はそんなもんでしょ。俺だって、ここに入学したときは、高校の頃に戻りたいってホームシックになったこともあったんだから」

瑞枝「うちーでも、そういう風になるんだ」
雅也「みずちゃんだって、インターンに行ってる間、ホームシックになったでしょ」

瑞枝「まあね。これから東京行ったら、同じようにホームシックになるんだろっうな」

雅也「あ、そういえばさ、最近加藤と毎日電話で話してるんだけどさ」

瑞枝「え、加藤と毎日？」

雅也「うん。あいつ、最寄駅からアパートまで二十分ぐらい歩くんだって。それで、帰

り道が暇だからって」

瑞枝「加藤は暇でも、うちーは忙しいかも
しれないのにね」

雅也「昨日電話で話してたんだけど、卒業式
の一週間ぐらい前に、親交のある同級生を
寄せ集めて、一日遊ばないかって」

瑞枝「結構な規模になるんじゃない？」

雅也「多分ね。日中アミューズメントパーク
みたいなところで遊んで、夜は飲み会みた
いにしようかなと思って。残れる人は、そ
のままカラオケとかでオールでも良いかな
って考えてるんだけど」

瑞枝「最後だもんね、それはそれで楽しそう」

雅也「みずちゃん、来る？」

瑞枝「当たり前でしょ。是が非でも行くわ」

雅也「加藤は、卒業式の一週間前から休みも
らって、こっちに帰ってくるんだって。ま
あ、卒業式終わったら、すぐに向こうに帰
っちゃうんだけどね」

瑞枝「时期的に、みんな新生活の準備で忙し

そうだから、集まってくれる学生が揃うかどうかだけだね。あつぽんは京都に行っちゃうって聞いてるし、なつ姐さんも東京で、ぐっちも千葉に行っちゃうし」

雅也「そうだね。まあ最悪、夜の飲み会からでも合流してくれても良いし」

瑞枝「楽しくなるだろうね」

雅也「楽しくさせるよ」

瑞枝「まさか、うちーが幹事？」

雅也「加藤が集まりたいって言い出したけど、あいつ今仕事抱えてるでしょ。だから、俺が幹事ってことで取りまとめとか、夜のお店の予約とかやろうと思って」

瑞枝「うちーだって、事務所開業準備でこれから一番忙しくなるときじゃん。それなのに、うちーに全部ふるなんて、あいつ何考えてんだか」

雅也「東京にいと、いろいろ不便でしょ。それなら、こっちにいる人間でやったほうが」

瑞枝「私で良ければ、手伝うからね」

雅也「ありがとう」

瑞枝「いよいよ、最後の集まりって感じにな
っちゃうね」

雅也「卒業式の後には、専攻ごとの集まりにな
るだろうしね」

瑞枝「専攻ごとの集まりが終わったら、集ま
れる人で集まっても良いけどね」

雅也「確かにね」

瑞枝「もうちよつと、見て回ろうよ」

雅也「そうだね」

と、立ち上がって去っていく。

N「卒業進級制作展まであと半月。ついに卒
業が、すぐそこまで来ている実感がありま
した」

つづく